

加奈子 (下)

小山内 美江子



おさないみ えと
小山内美江子

本名・笹平美江子。1930年横浜市生れ。47年鶴見高等女学校卒。51年東京スクリーンライター協会役員となり、独立プロ「真空地帯」「日の果て」などの映画製作に参加。

62年テレビ指定席「残りの幸福」(NHK)のシナリオ執筆以来、シナリオライターとして「七人の刑事」(TBS)「さむらい」(NET)「火曜日の女」(NTV)「アイフル大作戦」(TBS)「アンラコロの歌」(TBS)など数多くの作品を発表、活躍している。日本シナリオ作家協会会員。

加奈子(下)

昭和五十一年三月一日 初版印刷
昭和五十一年三月五日 初版発行

著者 小山内 美江子

発行者 根本 峰 好

発行所 株式会社 旺 文 社

東京都新宿区横寺町五五

郵便番号一六二

電話 東京(〇三)二六七一 一一一

印刷所 旺文社 日新印刷株式会社

専属

落丁・乱丁・不良本はお取り替
えします。本社に直接お申し出
ください。
※定価はカバーに表示してあり
ます。

0093 59004 0724

(許可なしに転載・複製することを禁じます)

601032

Printed in Japan

© 小山内美江子 1976
(中村印刷・穴口製本)

加奈子（下）

小山内美江子

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目 次

第十四章 母代わり

7

第十五章 再婚

26

第十六章 無理心中

44

第十七章 丸齧まるまげ

64

第十八章 試練

86

第十九章 義理の子

103

第二十章 十五対一

123

第二十一章 飯きずなの絆

143

第二十二章 惜別の歌

165

第二十三章 大往生

185

第二十四章 傷跡

204

第二十五章 再建

223

第二十六章 平和の光

242

装丁

大野隆也

第十四章 母代わり

両国の川開きの花火を楽しみにしていながら見ることも出来ずに亡くなった芙美の葬式は、七月、八月の花火の時期が過ぎた九月になって、しめやかに行われ、「長谷万」方の生活も普段に戻った。

芙美の付き添い人であった加奈子は、彼女の情のある看病が、長谷万のおかみ真佐に氣に入られ、後に残された幼い娘、喜子のために、芙美の一周忌までの一年という約束で、喜子の母代わりを頼まれ、気持ちよく務めていた。

幼い喜子にとって、母の「死」は理解出来ず、母親が急にいなくなった得体の知れない不安に小さい胸を痛めているのか、加奈子の袂の先にしっかりとしがみつこうようにして暮らしていた。加奈子もまた、そんな喜子がいとおしく、引き裂かれて暮らす我が子利之への愛と重なり合って、自分を離すまいとまっわりつく喜子に惜しみなく愛を注いだ。

真佐は、喜子の遊び相手さえしてくれればと言ったが、働き者の加奈子は、喜子のためにもと、積極的に家事にも励んだ。喜子の相手をしながら家事を手伝うことによって、女の子とし

ての心掛けが知らず知らずのうちに身につくようにと、一緒に遊びながら一つ一つ教えた。母親の芙美が娘へいろいろ教えておきたかったであろうことも、母代わりの一つとして代行したのである。

真佐は、ねえや代わりも務める加奈子を気の毒がったが、喜子のためには喜んでくれた。

「喜子も手伝っているのかえ。そうやって女の子は、なんでも覚えていかなきゃいけないんだよ」

そう喜子に言い聞かせる時の真佐は、普通の祖母の優しさを見せていた。

喜子を加奈子に任せたとの真佐にとって、節子の存在は心痛の一つであった。外腹の子とはいえ、長谷万の娘として、芙美とまったく同じように育てたつもりではあったが、節子には真佐の気持ちに通じていなかった。本当の母子なら通じ合えることも、義理の仲故に通じなかったのか、節子は自分の中に、ひねくれた考え方を育てていた。店の切り盛りに忙しく、母親としては失格の真佐に対する抵抗は致し方ないとしても、節子の行状の中で一番困った問題は、不縁になった元の亭主に呼び出されては、逢いびきを重ねていることであつた。先方には、すでに後添いが入っていたのである。そんな、女の意地のない節子に、真佐は腹立たしさと、哀れさを感じ、先様に対する義理もあつて、何とか良縁を見付けてやりたがっていた。

当の節子は、長谷万の娘として、当然、亡婦の後へ直り、婿の安造と一緒にあって、芙美の亡きあとの長谷万を継ぐつもりでいた。

その心づもりの一つとして、亡婦の荷物の整理をしていた所へ、男から電話が掛かり、節子

は外出した。節子の出掛けたことを知った真佐の表情にはきびしいものがあつた。加奈子は、電話のことを伏せておくつもりであつたが、うっかり喜子が真佐に喋^{しゃべ}つてしまった。加奈子は慌てて話題をそらそうとした時、ふと、喜子が母の写真を欲しがつたのを思い出した。その写真は、赤ん坊の頃の喜子を抱いた芙美の写真で、節子が整理していた芙美の貴重品の小箱に入っていた。

「あ、あのう、お二階にある奥様の大事な品物ですけど……、私、そそかしいものですから、お掃除の時にでも、うっかりどうにかしてしまふといけませんので、おかみさんのお部屋にでも」

今の喜子にとっては、母親の写真が貴重品であつたが、加奈子は写真だけではなく、将来の喜子のために、一品でも多く母親の形見の品を残しておいてやりたかつた。節子が、近々行われるであろう形見分けの時のために、加奈子にも品物を見て置くようにと言つたことが氣になり、せめて、その貴重品の小箱だけでも、真佐の部屋に移してもらい、管理して欲しかつたのである。

「いいんだよ、品物なんてのは……。そんなものを残したところで、当の芙美はいなくなつちまつたんだし、欲しい者が、欲しがって持つて行けば、それが供養になるんだから」

姉のものをなんでもほしがつた節子が、持ち出してしまふであろうことをすべて承知の上で、真佐のさばさばした言い方に、加奈子は返す言葉もなかつた。しかし、加奈子が言いたかつたのは、品物そのもののことではなく、少しでも母親の匂いの残つたものを、喜子への思いやりのために、母親への思い出と共に、保管してもらいたかつたのである。

「ま、あんたの気持ちとは分かるけど、二度と私に告げ口はごめんだよ」

加奈子は悔しかった。告げ口の意志がまったくなかったからこそ、自分の粗忽さを理由にしたのに、節子のことを持ち出したのは、真佐の方なのである。

「教えてくれるのは有り難いけど、気が付かなきゃそれは私の落ち度。落ち度で損をするのは、自分が未熟なんだと、私はそういう生き方をしているんだから、ま、気を悪くしないで、これからはそういう付き合い方をしてくださいよ、ね」

千万承知の真佐の口から、自分が未熟なんだと言われてしまうと、加奈子は、そこに本当の大人の姿を見た思いで、真佐には足元にも及ばぬ感じであった。

この年、利之は七五三の年であった。遠く離れて暮らす我が子の七五三を、一緒に祝うことの出来ない加奈子は、せめて心からのお祝いを送ろうと、喜子を寝かし付けた後、きぬに手紙を書いていた。

そこへ、真佐が入って来た。

手紙を片付ける加奈子から、七五三のお祝いのことを聞くと、真佐は、懇意にしている呉服屋があるから、明日にでも呼ぼうと言った。

「私も一緒に見立てさせておくれな。うちには、男の子がいなかったから、一度でいいから羽二重で熨斗目の紋服ってのを買ったんだよ。けど、うちのお給金じゃちよつと無理かな」

「いいえ、お給金のほかに、手持ちのお金も多少ありますし」

「いいのかい、そんなに張り込んじゃって。……よっぽど可愛がってたんだねえ、その甥御さ

「ん」
曖昧にうなずいた加奈子は、我が子と呼べない苦しさを、真佐の鋭い目から逃れるようにして、喜子の寝顔へ目を移した。

「可愛い顔して、……どんな夢を見ているんだろうねえ」

喜子の寝顔をのぞき込む真佐の言葉に、加奈子は、大野の利之へと思いをはせた。

利之も元気に暮らしているだろうか、今ごろ、あの子もどんな夢をみているのだろう……。風邪をひかないで、元気に七五三のお祝いをしてね……。

親と名乗れぬまま、七五三には、せめて我が手で造った晴れ着を着せてやりたい、そう願うしか術のない加奈子であった。

十一月のある日、昼食を工場へ届ける時刻にちょうど来客があり、行けない真佐に代わって加奈子が、お手伝いのお清と共に届けることになった。

馬道の店から言問橋を渡って、対岸の向島にある工場には、安造と、工場長格の清次以下の職人が働いていた。花火工場では、火の気は大敵、だから裏手にある休憩室にも、冬でも火鉢一つない。住み込みの職人達の食事も、昼は店から弁当が届き、夕食は長谷万へ食べに帰るという習慣になっていた。漏電や、ショートも、事故につながるものとして、電燈もなく、手元が暗くなると、その日の仕事はおしまいというのが、当時の花火屋であった。

「親方、そんじゃ飯にしちやいましょうか」

声をかけた清次に、安造は生返事をしただけで、星をひねくり返していた。

「いけねえや、あれが始まると、親方は飯どころの騒ぎでなくなっちまうんだ。お前達、先に食いな」

清次の一声で、職人達は、花火造りで黒くなった顔に、白い歯を嬉しそうに見せ、裏手へ向かっていった。食事を置いた加奈子は、思案する安造の傍に戻って、物珍しそうに手元をのぞき込んだ。

「あのう……、その黒いお豆のようなものは、なんですか？ お団子の小さいのみたいな……」

「星だ」

黒い星が花火となった時、どうして赤や青に変わるのか、加奈子は不思議であった。子供のように、真剣に質問する加奈子に、口の重い安造の口がほころび、花火の講釈を始めた。

「この黒いのは火薬だよ。赤くなったり、青くなったりする色は、この中に入^いえ^てるんだ」

安造は気軽に、真つ二つに割った星の断面のサンプルを取って加奈子に見せ、飴の変わり玉と同じ要領なのだと、説明を始めた。

「最初は、小せえ菜種のタネに、色の火薬を置く。そして黒い火薬をねる。そいつの上にまた、色を置く。そうやって庭に出てい^るように一段ずつかわ^かして、自分の思う大きさに仕上げていく。そいつをこの碗につめて行くんだ」

「それじゃあ、あの、これが花火なんですか？」

「ああ、こいつを両側から合わせて丸くなった奴が玉だ。星つてのは、菊なら菊の花びらの一つ一つさ」

「はーあ」 加奈子は子供のように、大きく感心した。

星と玉が分かった加奈子は、この玉が、どうして空へ高く上がるのか分からなかった。

「花火でえのは打ち上げるもんだ。筒の中へ打ち上げ用の火薬を入れといて、この玉を放り込んで火を落とす。理屈は鉄砲と同じで、火薬がはじけた勢いで、玉をまっすぐ空へ打ち上げる。その時、玉のヘソに火がついてちょうどいい高さに上がった時、割れるのさ」

加奈子は、まだすっきりしない顔付きのまま、安造をまじまじと見つめていた。

「玉の真ん中には炸薬くわくといって、中から玉をぶちこわす勢いの火薬が入っている。ヘソという導火線は、この炸薬までつながっていて、燃えながら空へ上がって行き、炸薬に火をつける役目をするんだ。そして、炸薬がこの星を外へはじきとばす時、星の火薬の一ツ一ツに火をつける。だから星は、花火師が決めた色の花になって、まあるく空に広がる。そして次の色に変わる」

熱っぽく話す安造の説明を、加奈子は、真剣なうなずきを返しては、聞き入っていた。その安造の火薬で黒く染まった指の爪に、ふと目を止めた加奈子の耳に、いつの日か逗子の病室で話していた、亡くなった芙美の言葉が甦よみがえってきた。

「昔は一緒にお寿司を食べて、あの黒い爪で握りをつままれるのが、私はとってもいやで、いやで、……世間知らずの家付き娘だったのね、私は……、でも、離れて暮らしてみて、あの人の良さが、ほんとに分かった……」

あのころの芙美は、独り暮らし寂しさを、生きたいと願う気持ちで紛らせていたものだった。どれ程、生きたかったであろう芙美の、切々たる心が、今の加奈子の胸に甦よみがえり、新たな悲しみに捉えられていた。

「花火でえのは、色、形、そして音、この三ツが揃わなきゃあ、本当の上玉とはいえねえんだ」
まだ続いていた安造の花火談義に、加奈子は我に返り、慌てて耳を傾けた。

裏手から出て来たお清と、職人の市三が、話し込んでいる二人を見付けて驚いた。

「あれ、うちの旦那さんが口を利いてるよ。昼から雨だよ。これは、きつと」

「花火のこととなりや、特別さ。声をかけてやらねえと、あの人たっぷり一時間はとっ捕まるぜ」

「ほんと?! そら大変だ。篠田さん。私、帰るけど」

お清に声をかけられた加奈子は、驚いて振り返った。刻のたつのも忘れ、腰を落ち着け、耳を傾けてしまっていた自分に気付いた加奈子は、慌てて安造に詫びた。

「まあ、申し訳ございません、お食事でしたのに、私、すっかり」

「あ、いや」 話題が変わったとたんに、口重の安造に戻ってしまった。

加奈子が、帰ろうとして安造に挨拶した時には、安造はすでに星に氣を取られ、加奈子には目もくれなかった。その真剣な安造の姿に、加奈子は思わずほえみかけていた。

そのころ、馬道の家では、加奈子の姿が見えないと、喜子が泣きじやくって、真佐と節子を手こずらせていた。節子が紙芝居屋さんが来るころだからと喜子を外へ連れ出そうとしたが、喜子はきかなかった。

戻ってきた加奈子は、喜子の泣き声を耳にすると、大急ぎで茶の間に向かった。

「小母ちゃーん！」

加奈子の顔を見たとき、喜子は泣きじゃくりながら、その首にかじり付いてきた。加奈子は、びっくりはしたものの、しっかりと喜子を抱きしめ、

「すんません、喜子ちゃん。どうかすったんですか？」

「急にいなくなっちゃったんで、怖かったんだろ」

母親の死と同じような恐怖を抱いたらしい喜子に、加奈子はいとおしさを覚えた。

「……喜子ちゃん、ごめんなさい。小母ちゃん、つい花火が珍しくて今まで見物してしまったもんだから、すっかりおそくなってる」

黒いお団子のような星が、あのきれいな花びらになるという花火の話をしてやることで、ようやく喜子の機嫌も直った。

「喜子、知ってるよ」 花火屋の跡取り娘らしく得意そうに言った。

「まあ、えらいのねえ。小母ちゃんは花火って一体どうなっているのか、今日まで不思議で、不思議で、たまらなかったの」

感心している加奈子に、喜子は嬉しそうな笑い声を上げ、子供の扱いが苦手な節子の胸を、ほっと撫で下ろさせた。真佐も、花火に興味を示す加奈子に、満足したらしく上機嫌であった。

「おや大変。長谷万に、花火バカがもう一人増えた」

「まあ……」

笑う加奈子に、喜子は遊び相手をせがんだ。仲良く手をつないで出て行く二人の後ろ姿に、節子は軽い嫉妬しとの目を向けた。

「……私が子供に好かれるたちならいいんだけど」